慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	田代和生著『江戸時代 朝鮮薬材調査の研究』
Sub Title	
Author	鈴木, 晃仁(Suzuki, Akihito)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2000
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.93, No.3 (2000. 10) ,p.667(155)- 669(157)
JaLC DOI	10.14991/001.20001001-0155
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20001001-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」93巻3号（2000年10月）

書評

田代和生　著

『江戸時代　朝鮮薬材調査の研究』

慶應義塾大学出版会，1999年，574頁＋viii

優れた歴史のモノグラフは，歴史学のさまざまなディシプリンにまたがって分類することが可能であることが多い。現在であれ過去であれ，人間の活動は多数のファクターが絡み合っている複合体であり，その活動が記された資料を的確に把握しようとすれば必然的に多面的な考察が必要になる。あるアーカイヴの豊かさを損なわずに全体像を捉えようとした歴史研究が，「××史」という区分けを拒むことがしばしばあるのは必然的であると言ってよい。田代和生『江戸時代　朝鮮薬材調査の研究』は，まさにこのタイプの著作である。田代の労作は，享保期の日本外交史・日朝関係史の書物と考えることも，財政政策史への貢献として読むことも，あるいは博物学史の作品として評価することも可能であろう。そのような可能性を念頭に置いた上で，ここでは田代の書物を「医学史・医療史」，特に「薬の歴史」の研究の文脈の中に位置付け，ヨーロッパを中心にした研究者の視点から書評を試みたい。

ヨーロッパとアメリカの医学・医療の歴史の研究は近年になってめざましい充実を見せている。その中で，病気の治療法（therapeutics）の歴史の大枠がやっと見えてきたのは比較的最近のことである。治療の歴史の研究が遅れた大きな理由は，何と言っても20世紀に入るまで「治療」は西洋医学の恥部であったからであろう。ヨーロッパの内科医学は，話を「治療」に限れば20世紀の前半までほぼ全面的に無力であり，無益で往々にして有害な治療法を患者に施しつづけてきた。（ある医学史家によれば，医者にかかったほうが患者の生存のチャンスが大きくなるのは1920年代だという。）過去の医学の進歩と栄光を記すことに情熱を注いできたかつての医学史家たちが治療の歴史を正面から取り上げることを躊躇ったのは，そこに顕彰すべきものがあまりに少なく，理解に苦しむような「蒙昧さ」があまりに多かったという事情が大きく影を落としている。言葉を換えると，治療の問題が医学史の本格的な研究対象になるためには，「進歩」とは別の枠組みでその歴史を眺め始める必要があったのである。

現代の私たちが病気を治したり予防したりする方法は大別すると三種類ある。ガンや脳梗塞にならないために，タバコを止めたり食事内容に気をつけたりエアロビクスに通ったりするのが一つ。病気になった時に「薬を飲む」のが一つ。そして外科的な手術によって病気の原因となっている部分を切り取ったりするのがもう一つである。この三者のなかで，最後の外科的な侵襲を除き，第一と第二の方法はヒポクラテス以来，歴史上長い期間にわたって広く治療・予防の手段として用いられてきた。ヨーロッパの医学的伝統の中で，前者はregimen（養生）と括られ，後者はmedicine（薬）として捉えられる，医者の立場から見ても患者の立場から見ても大きく異なった原理に基づいて病気をコントロールする方法であった。患者の側から見たとき，regimenは数ヶ月から数年，あるいは一生にわたった生活習慣の改変を要する長期にわたって持続される行為であり，また食事，運動などの生活上の習慣を選択するという意志の力を用いて主体的に行う行為である。それに対しmedicineの方は，比較的短期間で完了するニートな行為であって，薬を飲みさえすればそれでことが済むと言ってもよい，患者の主体的なかかわりの程度が低い行為であった。

近年の研究の進展により，17世紀から20世紀までのregimenとmedicineの歴史において，幾つかの大きなシフトがあったことが明らかになりつつある。その中で特に注目に値するのが，Har-

old Cook, Roy Porter らが唱えた，17世紀から18世紀における regimen の衰退と medicine の興隆のモデルである。かいつまんで言うと，Cook や Porter らが提唱しているシナリオは，イングランドやオランダといったヨーロッパの先進地域の都市部の上流・中流層において，病気の治療は，長期間にわたり意志力を絶えず行使してライフスタイルを選択するという行為に依ることが少なくなり，薬を飲むという単純で局限された行動によって行われるようになった，というものである。治療の重心がこのように変化した背景にあった事情として，二つのファクターが考えられている。即ち，専門職（内科医）とギルド（外科医と薬種商）のタイトな支配のもとにあった医療の領域が，新たに市場経済の波に洗われて徐々に変容した結果，「商品の購買によって健康になる」という受療のパラダイムが優勢になったこと。第二に，宗教改革の厳しい禁欲と彼岸性の希求から，現世での善と功利を追求する啓蒙期へとヨーロッパの先進地帯の文化が変容したこと。この二つの事情を背景に，処方箋がなくても代金を払えばすぐに買え，しかも時間と意志力のコストをかけずに「健康」になれるという謳い文句の「薬」の重要性が上昇したこと，というのが，医学史家たちが今のところ受け入れているシナリオである。

このようにして重要な商品となった薬とそれの原材料となる動植物は，17世紀から啓蒙期にかけてのヨーロッパの文化と商業活動の中で大きな関心の対象になる。いわゆる大航海時代から始まった新世界の動植物採集と，その中から薬効があるものを確定する作業はさらに拡大していく。新大陸由来とみなされることが多かった梅毒に対する治療薬は，ヨーロッパの外に自生する植物から得られるに違いないという期待のもと，伝統的な水銀と並んで，南アメリカから輸入されたグアイヤックが治療薬としてもてはやされ，輸入業者のフッガー家に大きな富をもたらした。1630年代にイエズス会士がペルーで発見したキナの木の皮は，現在のマラリアにあたる熱病の特効薬として注目され，その「特効性」は当時の治療のパラダイムの根本を揺るがすものとして議論を呼んだ。1687年にジャマイカに滞在した医者の Hans Sloane は，700点に上る植物のイラストと押葉標本（現在ロンドンの Natural History Museum に素晴らしい状態で保存されている），そして当地で医薬品として使われていたカカオを持ちかえった。このカカオをミルクと混ぜるレシピ（すなわちチョコレート）の特許からスローンが得た財産は，大英博物館の起源となったコレクションを買い集めるための重要な資金源になった。患者の受療行動が支えた薬物への需要は「博物学の世紀」を駆動する力の一つであったと言ってよい。

こういったヨーロッパの動きに微妙に関係しながら，江戸時代の日本においても本草学と自然誌が興隆したことは，木村陽二郎らの優れた研究が既に示したことである。これまでの日本本草学史の研究は「自然誌家」naturalist というグループに分類しうる個人たちを研究の基本的な焦点とし，彼らが残した本草学・自然誌の書物をグリッドとして，そこから自然誌と言う知的営みの内実とそのコンテクストを再構成しようというスタイルをとっている。このスタイルは，特に自ら植物学者である木村にとって極めて自然なものではあるが，メリットとデメリットの双方を持っている。科学的な思考・活動の過程と変遷・差異をつぶさに検討できるということがメリットであり，一方デメリットは，本草学という営みが行われた社会的な文脈は見えにくくなるということである。木村らの文脈化への努力は，無論ある程度の成果を上げているが，近年のヨーロッパの自然史研究が，博物学の社会的・経済的・政治的な広がりを明らかにしているのと較べると，制約を感じるのは筆者だけではないだろう。

田代の仕事の大きな意義は，「科学者と科学書」を基本的な研究単位とするタイプの江戸期の医学史・科学史研究に久しくつきまとい，そこに閉塞感と言ってもよいものすら漂わせてきた資料的な限界を突破したことにある。やや乱暴な纏め方を

許してもらえるなら，「外交文書を使って医学史を研究する」ことが可能であることを鮮やかに示したことであると言ってもよい。田代が用いた資料の核は，1718年から1751年にかけて，対馬藩宗家が幕府の命を受けて朝鮮の倭館において行った，『東医宝鑑』に記載された薬材の原料となる動植物を確定した作業の記録である。田代の緻密な研究は，この一見すると地味な資料をして，当時の日本の薬学が営まれていた文脈を雄弁に語らしめている。そして田代が明らかにしたのは，評者には同時代のヨーロッパの状況を思い起こさせずにはおかない，薬をめぐるダイナミックな動きである。田代によれば，18世紀の薬材調査の背景に存在した第一のファクターは，17世紀の後半から日本では朝鮮人参の大ブームが起きていたことである。（対馬藩が幕府の認可のもとで輸入していた朝鮮人参の江戸の小売所「人参座」には徹夜行列ができるほどであったという。）第二のファクターは，この朝鮮人参の代価として銀が支払われ，国内の銀が対馬藩を通して流出していることに幕府が問題視していたことである。そして第三のファクターは，八代将軍吉宗が構想した，朝鮮人参を中心に朝鮮医学の薬材を日本で栽培・生産し，自給しようという壮大な計画であった。朝鮮薬材調査とはすなわち，1）国内の需要，2）貨幣政策，3）殖産興業政策を背景にした，自然誌という知的な営みであったことが，田代によって明らかにされたのである。外交・貿易・行政文書というこれまで医学史家たちによっては必ずしも丁寧には読まれてこなかったタイプのアーカイヴから，田代は圧倒的な豊かさと広がりを持って，18世紀の日本の薬学・博物学・本草学の政策的な文脈を描き出し，医学史・医療史の新しい可能性を確かな形で示唆している。巻頭に全掲された美しい動植物の図録，巻末の詳細な資料とともに，これからの医学史が向かうであろう新しい方向において高いスタンダードを示す道標として本書が読まれることを評者は確信している。

しかしながら，本書が描き残したこともまた多い。モノグラフである本書に18世紀日本の薬の歴史の諸問題の総花的な扱いを期待することはフェアではないし，また「この問題についてもっと知りたい」という気持ちを起こさせることは，ある書物の欠点と言うよりむしろ長所であると評者は考えていることを断った上で，本書に「欠けている」視点を敢えて二つだけ指摘したい。まず第一に，ヨーロッパ諸国の薬学と博物学との比較があれば，と思うのは評者だけではないだろう。田代が描く享保期の日本の薬学の状況は，驚くほど同時代のヨーロッパの状況と似ている。田代の学識を持ってすれば，さらに共通点や相違点を浮き彫りにし，薬物の比較史の視座を築けたことは疑いない。もう一つは，「薬を資料とした身体感覚の社会史」の視点である。より具体的には，いったい「なぜ」この時代に人々は朝鮮人参を欲したのだろうか，という問いである。アメリカの医学史家，Charles Rosenberg の至言によれば，薬は患者の身体を媒介にした医者と患者のコミュニケーションの道具である。過去において用いられた薬は，医者と患者が言葉を用いずに行っていたコミュニケーションが封じ込められたタイムカプセルであり，過去の患者の身体感覚が刻み込まれたタブレットであると言うことができる。医学書の症例に記載された処方，病院の膨大なカルテに記載された処方――これらは，「身体感覚の社会史」を計量的に行うことを可能にする極めて豊かな資料である。医学史家たちがまだ手にしていないのは，多くの歴史家たちにとってまったく未知のタイプの「資料」である「薬」を「読み解く」ための方法論である。田代を含めた日本の医学史の研究者たちから，この社会史の一分野を切り開くブレイクスルーが達成されることを祈ってこの書評を閉じたい。

鈴　木　晃　仁
（経済学部助教授）